

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 犬山市立東小学校 (※正式名称を記載)
種 別 ☐ 保育園・幼稚園 ☒ 小学校 ☐ 小中一貫^{※注1}
☐ 中学校 ☐ 中高一貫^{※注2} ☐ 高等学校
☐ 教員養成大学 ☐ 専修学校、各種学校
☐ 特別支援学校
☐ その他（例：小中高一貫）
※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む
所在地 〒484-0802
愛知県犬山市羽黒安戸西一丁目2番地
E-mail higashi@inuyama-aic.ed.jp
Website http://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2310189
幼児児童生徒数 男子 199名 女子 177名 合計 376名
幼児・児童・生徒の年齢 6歳～12歳

2. 報告期間

平成29年4月～平成30年3月

※報告書提出時点～平成30年3月末までの活動は、予定（見込み）として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要

E S D の視点に立った教育課程作りを推進し、総合的な学習と教科とをつなぎ合わせながら、E S D カレンダー作成を行ってきた。また、E S D を現職教育の柱として、教員同士がE S D でつながる教育活動を展開し、自ら行動し、未来を切り拓く児童の育成を目指して学校全体で取り組んだ。

① 身近な自然を体験する活動（低学年）

低学年では、生活科を軸にして、学校内の自然や地域に目を向けて、自然を愛し、草花や作物の育成をする中で、動植物が生きていることを実感し、いのちを大切にしていこうとする心を育む教育活動を展開した。1年生では、植物を育てていくことで成長していき、さらに、次の世代を種というかたちで残していくことでいのちが受け継がれていることを実感した。2年生では、四季折々の作物を育てて味わい、四季折々の旬の食べ物について考え、いのちをいただくことの意味を感じ取った。

② 自分にできることを考えて行動する活動（中学年）

中学年では、総合的な学習の時間を軸として、地域の自然環境や人々に目を向けて、地域の環境を調査したり、地域の人々と接したりすることで、自然や地域を愛する心を育む教育活動を展開した。3年生では、学校に隣接する半ノ木川の水質調査から、地域の環境の変化を考え、何をしていくことが大切なのかを考えた。4年生は、ユニバーサルデザイン化について考え、誰もが過ごしやすい社会にするためには、福祉を充実させ、自分たちでできることをしていく方法を考えた。

③ 自分を見つめ、地域に貢献する活動（高学年）

高学年では、地域等の力を借りながら、自分たちが貢献できることを模索し実践する中で、社会や地域の人々に貢献することがすべての人の喜びにつながり、自分たちの喜びへと繋げ、これからの社会を生き抜いていこうとする自負心を抱くことができた。5年生では、地

域の方と共に、米を育て、育てた米を利用して、自分たちが地域や社会に貢献する方法を考え実践した。6年生では、海外に目を向け、貧富の差による医療や食料事情について考えたり、貧困な地域へ、自分たちでできる支援活動を行ったりして、グローバルに考えて生きていこうとする気持ちをもつことができた。



① 2年生 作物の植え替え



② 4年生 福祉交流会



③ 5年生 お米を使ったアイデア料理発表会



③ 6年 服のチカラプロジェクト

(2) 活動の詳細

本校は、犬山市の東部の田園地帯が広がる中に位置している。自然に恵まれ、野鳥や生き物が生息し、自然を生かした教育活動を展開することができる環境にある。また、地域の力を生かし、地域と協力し合った教育活動を展開することで、地域に根付き、環境を考え、社会に貢献しようとする人間づくりを柱にした教育活動を展開することができる。

① 活動内容

生活科や総合的な学習を軸として、各学年の取組は以下のようである。

1年生は、校内の自然環境に目を向け、四季折々の草花や木々の様子から、生きている植物とのつながりを感じることができた。また、東山動物園に訪問して動物の糞について学んだり、日本モンキーセンターの出前授業からはチンパンジーやサル赤ちゃんについて知ったりして、命や命を育む営みの大切さについて学び、生きることへの喜びを感じ取ることができた。

2年生は、年間通じて季節の作物を育てた。作物を育てることが自分たちの命を育むものであり、育てること、収穫すること、それを味わうことによって、自然への感謝の気持ちをもつことができた。それとともに地域に出かけ、地域の人とふれ合う活動を通して、人とのつながりの大切さに気付くことができた。また、自分の育った生い立ちから今までを振り返り、育ててくれた家族への感謝を感じ取り、目標をもって生きていこうとする気持ちを高めることができた。

3年生は、「生き物のようすから未来を考える」をテーマとして、学校付近を流れる半ノ木川の生物を観察し、環境の変化について学習した。日本在来種の生物や絶滅が危惧される生物を発見したり、外来種が生息し環境の変化を感じたりして、自分たちが過ごしている地域の環境を守っていこうとする気持ちを高めることができた。さらに、国語科「姿を変える大豆」から、大豆の変身を取り上げ、私たちの身体と食べ物との関係を見つめ、人間の知恵を学ぶとともに、将来につながる人と生き物とのつながりについて学ぶことができた。

4年生は、「福祉を通してともに生きる社会」をテーマとして、障害をもった方や高齢者

を学校に招いて障害について学習したり、疑似体験したりする活動を何度も行った。また、ふれ合う活動を通して、障害者や弱者の立場に立って考えて思いやる心を育む学習を展開したりした。また、校外学習では、中部国際空港に出かけ、「ユニバーサルデザイン」について学習し、すべての国の人が安心して利用することができるユニバーサルデザイン化の工夫について学んだ。こうした取組により、社会や様々な人とのつながりや生き方について考えることができた。

5年生は、「お米から見る日本」をテーマとして、地域で農業を行っている方々から、「稲作」を学んだ。そして、食の安全や作物にまつわる日本の伝統や文化をつなぎ合わせながら、日本のすばらしさを感じ取り、日本人としての誇りにつなげてきた。また、できた米を利用した活動のアイデアを練り、実践した。具体的には、家庭科で「お米を使った料理の研究」を行い、自分が取り組んだ米を使った料理の仕方を模造紙に書いて発表し、共有化することで、米のすばらしさ、大切さを実感することができた。その一方で、一次産業と対比した「物づくりの愛知」の伝統や技術を学習し、日本の未来を考える学習を行う。それにより、日本人として生きることへの自信と将来への希望につなげることができた。

6年生は、「世界から見る日本」をテーマとして、希望の未来を創造するために、私たちにできることを考え、行動できる子を育てたいと考えた。第1期では、「日本の探究」をテーマとし、社会科とつなぎ合わせ、歴史学習をベースとして、我が国の伝統や文化に触れる体験学習や修学旅行での見学を通して学んだことをまとめて伝える学習を行った。第2期以降は、「世界の現状の探究」をテーマとし、貧しい国の現状を考え、自分たちにできることを模索しようとした。具体的には、貧しい国の子どもたちに服を送る活動（届けよう服のチカラプロジェクト）や、プルトップ回収運動、エコキャップ回収運動等を行い、積極的に自分たちのできることを実行してきた。これにより、自らの使命に気付き、生きることへの感謝を深め、希望の未来を創ろうとする学習を展開した。

活動の成果としては次の点が挙げられる。

- すべての学年の活動も、前年度の取組を意識した取組ができた。
- 現状の理解から始まり、体験や活動を通して、調べたり話し合ったりするなかで自分たちがやらなくてはならないことを自覚して行動しようとする学習活動を展開することができた。
- 調べ学習や話し合いから、多面的に考えたり、判断したりしようとする資質が育ち、意欲的に学習しようとする態度が育った。
- 自分の姿を見つめ直し、将来の自分や周り（地域）について考え、地域や社会に貢献して生きていく気持ちが育っている。

一方、次期指導要領で新たな教科として外国語学習の授業時間確保に向けて、学校行事の削減や各学年での体験的な活動の見直しが今年度行われ、やや深まりがやや足りなかった学年もあることは否めない。次期指導要領の柱である「主体的・対話的で深い学び」がE S Dの教育活動と結び付いている。今後は、総合的な学習の時間や生活科を軸としながら、E S Dをすべての教科と関連付けながら、教育活動を展開するために、E S Dカレンダーを充実させていきたいと考えている。

2.

ア. 活動分野（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input checked="" type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input type="checkbox"/> 3. 防災	<input checked="" type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input checked="" type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input checked="" type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input checked="" type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input checked="" type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力（複数選択可）

<input type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input checked="" type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間（複数選択可）

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述)	

エ. 使用した教材（書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名）

--

- ① ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

本校の現職教育のテーマを「自ら行動し、未来を切り拓く児童の育成～E S Dでつながる教育活動の展開～」とした。昨年度までの7つの資質と能力から、今年度は、身に付けさせたい力と目指す子どもの姿を、職員全体で議論し、次の4つを設定して共有化を図った。

- ① 他者と協力し、コミュニケーションを行う力（コミュニケーション力）
積極的にコミュニケーションをとり、仲間と協働して学習しようとする
 - ② 物事を多面的に捉えて考える力（思考力）
つながりを意識し、多面的に物事を考え、多くの発想を生み出そうとする
 - ③ 総合的に判断する力（判断力）
様々な考え方や捉え方を総合的に判断してまとめ上げ、最適解を求めようとする
 - ④ 建設的に計画を立て、実践する力（行動力）
物事の筋道を立てて、仲間と共に、自分にできることを実行しようとする
- これらの力の育成を、現職教育を中心に据え、E S Dでつながる授業研究を行った。

- ② 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

授業研究会で、どの教科にもE S Dとの関わりをもたせ、指導案にもそれぞれの指導者の考えを述べ、授業の観点がE S Dにどうつながっているかを意識した。また、授業後の検討会では、E S Dにつながる授業の在り方や学習テーマや発問の設定について検討しながら、全体でE S Dについての考えを共有することができる取組を行っている。

- ③ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

各教科に、E S Dにつながる身に付けさせたい力と目指す子どもの姿を明確にして実践し、評価していくことで、学年毎のつながりや学校全体での発達段階に応じた目標の設定を行うことができるようになった。しかしながら、各教科の目標とE S Dの目標と取り違えたり、教科としての目標が達成できない場面もあったりして、授業づくりのさらなる工夫と目標の明確化を行っていく必要がある。

- ④ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

市教育研究会、東海帰国子女研究会、尾張地区青少年赤十字加盟校交流会等で、本校のESDへの取組を発表した。市教育研究会では、今年度ユネスコスクールに加盟した学校への参考にもなった。こうした発表により、本校の取組について理解が得られ、ESDの教育活動を啓発することができた。

- ⑤ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

本校教諭の酒井俊輔は、今年度、10月に、県ESDコンソーシアムでファシリテーターとして参加し、発表した学校の取組がどのようにESDにつながっているかを述べるとともに、それぞれの学校間をつなぐ役目を果たした。

- ⑥ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

特になし。

- ⑦ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

本校の5年生、6年生は、学習発表会で、ESDで取り組んだ内容を劇化して発表した。5年生では、米づくりから、地球の環境問題に発展させて考え、生き物や人間にとって、空気が生きていくにはなくてはならないものであることを訴えた。また、6年生は、日本のよさや世界の現状を学習して、貧困な国や恵まれない子どもたちの世界の現状を知り、自分たちができることに取り組むことを発表した。こうした発表が他の学年の児童や保護者、地域の方にも共感が得られ、ESDの本校の取組をアピールすることが、子どもたちの今後の活動への意欲にもつながっている。

（3）平成30年度の活動計画（200～400字程度）

今年度はESDにつながる身に付けさせたい力と目指す子どもの姿を明確にして、目標づくりをしたことが大きな成果である。来年度は、この目標に、どの学年がどこまで迫れるかを明らかにしながら、学年毎の到達度を明確にしていきたいと考えている。また、外国語活動の時間数を生み出すための削減に対応するために、各学年で、ESDカレンダーを見直ししながら、精選した取組を行い、計画的かつ効果的な取組をしていく必要がある。そのためには、学年内の連携とともに、学年間の連携を図りながら、ESDにつながる教育活動を意識しながら展開していく必要がある。また、他校との連携も本校の課題である。同じ市内の学校や他地区の学校とのつながりも来年度は図っていきたい。